

## 国語科単元学習を創造するための検討カテゴリ

—国語科授業における行為の「ふさわしさ」の検討カテゴリの再考—

達富 洋二

### 1. 問題の所在

本学会誌第 42 号「国語科授業における行為の「ふさわしさ」の検討カテゴリ—「今、ここ」の記述からはじめる「授業の研究」—」（達富 2014）において、「授業の研究」のためのカテゴリとして、以下のような考えを示した。

「今、ここ」の記述からはじめる「授業の研究」のためには、行為の「ふさわしさ」とその「ふさわしさ」の変容を検討する（評価する）観点としてのカテゴリが必要である。そのカテゴリは「一人一人が自分の問いをもつことにつながる課題の提示（ふさわしい問い）」、「一人一人の学習の具体化につながる思考操作の提案（ふさわしい行為）」、「一人一人の学習の軌跡の可視化につながる記述の場の提供（ふさわしい場）」である。

この三つのカテゴリは「授業の研究」のための検討カテゴリとして有効であるとともに「授業の創造」のための留意点としても有効であるとの報告（田崎ら 2015）がある。授業の研究（授業を評価すること）において留意すべきことがらと授業の創造（授業をつくること）においてのそれとが重なることは当然のことであるが、このような検討カテゴリは授業の質を保つための枠組みであるだけでなく、子どもの変容や教師の成長を可視化する枠組みとしても有効であると考えられる。

一方で、平成 27 年 8 月 26 日の「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」を受けて、「蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していく」ことができる資質や能力の育成に向けた国語科単元について考えるとき、このような検討カテゴリの枠組みを点検することを忘れてはならない。変わるものと変わらないもの、変えるべきものと変えてはいけないものを十分に吟味するからこそ、枠組みの信頼性は保たれる。

そこで、改めて本研究における三つのカテゴリの点検を行った結果、基本的な考え方の軽微な変更にともない三つのカテゴリを再考することが必要であるという結論に至った。

基本的な考え方の軽微な変更とは、上述の論点整理を一つのきっかけにするとともに、これからの社会で求められるであろうコンピテンシー・ベースの学習へのパラダイムの変換によるものである（奈須 2015）。

授業においては、教科にかかわる資質や能力の育成だけではなく、子どもの学習における自律性の育成を目指す必要がある。いわゆる IRE 構造で進められる授業では、教師の権威性が大きな影響をもつため子どもが自ら学習の文脈をつくっていきこうとすることに消極的になることが少なくない。

もちろん、入門期の授業においては、教師の権威性によって子どもの学習は適切に導かれ、効果を残すことも多い。また、学習方法を習得する時期においても教師の権威性が有効にはたらくことも事実である。しかし、教師の権威性が固定化してしまうと、子どもが自律性を育む機会を逃すことになることもある。子どもが学習の文脈を自律的につくっていくことができるようになるためにも、授業を創造することのパラダイムの変換が必要である。

その一つの有効な方法として、グループ学習を取り入れた単元学習があると考えられる。国語科単

元学習の充実、図らずもコンピテンシー・ベースの授業を創造することにつながると考えられる。

再考する点とその理由は以下の3点である。

まず、「自ら問いを立ててその解決を目指す」ことにつながるような課題は、一単位時間ごとの学習課題（小さな課題）を提示するのではなく、単元のはじめに単元全体を通した学習課題（大きな課題）を提示する必要があると考えられるからである。

また、「他者と協働しながら新たな価値を生み出していく」活動にするためには、発問や指示によって思考操作を提案するのではなく、学習課題（大きな課題）の中に含めて提示するとともに、その思考操作が自ずと繰り返されるような言語活動を提案することが効果的と考えられるからである。

さらに、言語活動が「蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断していく」ように充実していくためには、記述の場の提供としてノートや学習プリントの活用を設けるだけでなく、言語活動の深まりにともなった学習のてびきを提供する必要があると考えられるからである。

これらについては、現職教員の研修会等でも共通の話題として取り上げられることが多く(1)～(8)、教室の事実からの声として学ぶところが大きい。

このようなことを背景に、国語科授業における行為の「ふさわしさ」の検討カテゴリを再考し、国語科単元づくりの検討カテゴリを示すことが本研究の目的である。

## 2. 再考した検討カテゴリ

本研究では、国語科授業における行為の「ふさわしさ」の検討カテゴリを国語科単元づくりの検討カテゴリとし、以下のように考える。

### (1) 自ら問いを立ててその解決を目指す学習課題の提示

：「自ら問いを立ててその解決を目指す」ことにつながる学習課題の提示は、一単位時間における小さな課題ではなく一つの単元全体を通した大きな課題を示して子どもを自らの問いをもった学習に導くことである。

### (2) 協働しながら新たな価値を生み出す言語活動の提案

：「他者と協働しながら新たな価値を生み出していく」ことにつながる言語活動の提案は、グループでの活動を中心とした具体的な学習行為に子どもをいざなうことである。

### (3) 主体的に判断して学び続ける学習のてびきの提供

：「主体的に判断して学び続ける」ことにつながるてびきの提供は、記述の場としてのノートや学習プリントの活用を充実させるだけでなく、主体的な判断の実現を導く具体的な手がかりを子どもにさずけることである。

## 3. 検討カテゴリの再考

### 3.1 自ら問いを立ててその解決を目指す学習課題の提示

子どもが教師の期待する正解を探すのではなく自ら問いを立ててその解決を目指すことができるよう、教師は「指導事項」「思考操作」「言語活動」を示した学習課題を提示する必要がある。

一単位時間における小さな課題ではなく一つの単元全体を通した大きな課題を示して子どもを自らの問いをもった学習に導くために、以下の5点に留意したい。

- ① 子どもにとって本単元は何をする単元であるのかが具体的に分かるよう、学習指導要領に示された指導事項を精選し学習課題に位置づける。

- ② 子どもが既にもっている力をはたかせることができるよう、具体的な思考操作を学習課題に位置づける。
- ③ 子どもの主体的な学習が展開するよう、育成を図る力の習得にふさわしい言語活動を学習課題に位置づける。
- ④ 学級全体の学習の中で個人の学習が深まるよう、「個人の学習課題一覧表」を作成して配布する。
- ⑤ 深い思考（ふみこんだ思考）をする単元になるよう、すでに習得している力だけでは解決できない真正な課題を設定する。

### 3.2 他者と協働しながら新たな価値を生み出す言語活動の提案

子どもがすでにもっている資質や能力をはたかせながら新規の資質や能力を習得していく過程で他者と協働しながら新たな価値を生み出すことができるよう、教師は子ども自らが単元の学習をデザインできる言語活動を提案する必要がある。

グループでの活動を中心とした具体的な学習行為に子どもをいざなうために、以下の6点に留意したい。

- ① 学ぶことと社会とのつながりを位置づけた単元になるよう、国語の能力を習得し、自らの課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探求し、表現していく充実した言語活動を設定する。
- ② 意味のある協働的な学習によって展開する単元になるよう、子どもにとって必然性のある「言いたい。書きたい。知りたい。やってみよう。」過程とそれを自分の言葉で「表したい。伝えたい。」過程を一体化させた言語活動（課題解決過程の学習）を設定する。
- ③ 課題の発見と解決に向けて主体的で協働的に学ぶ単元になるよう、国語科の指導事項を子どもの主体的な活動を通して確実に育成できる言語活動を設定する。
- ④ 一人一人が確実に資質や能力を習得できるよう、個人学習やグループ学習などの学習を経つつ最後は個人に戻して完結できるように展開する。
- ⑤ 一人一人の子どもが学習材を自分の課題解決に合わせて活用できる単元になるよう、複数の材料の中で考えられるような学習材や学習のてびきを提供する。
- ⑥ 子どもが学習材や学習のてびきの全体とある部分を関連づけることができるよう、学習の対象を全体と切り離して細分化（場面ごと・段落ごと）したり、部分的で小刻みな発問を繰り返したりしない。

### 3.3 主体的に判断して学び続ける学習のてびきの提供

子どもが蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断して学び続けることができるよう、教師は個々の伸張の程度にふさわしい学習のてびきを提供する必要がある。

主体的な判断のための具体的な手がかりを子どもにさずけるために、以下の12点に留意したい。

- ① 子どもの主体的な学習を実現することができるよう、説明型てびき、台本型てびき、モデル型（言語活動）てびき、モデル型（思考操作）てびき、語彙集型てびき、話しかけ型てびき、チェックシート型てびきなど特色を活かしたてびきを作成する。
- ② 子どもが自身の学習を評価しながら見通しをもって進められるよう、この学習において目指すものが明確ではたかせる資質や能力が具体的に示されたものを作成する。

- ③ 本単元で付ける資質や能力を自覚し自分の学習課題（自分の「問い」）をもてるよう、モデルを読む時間を設定する。
- ④ 言語活動がモデルの複写にならないよう、モデルを活用して自分の表現を作り出す手がかりになるものを作成する。
- ⑤ 子どもが主体的に言語活動を進めていくことができるよう、意味を創造できる見通しになるものを作成する。
- ⑥ 説明型てびきが一般的な参考書にならないよう、個々の伸張や特定の問題に合ったものを作成する。
- ⑦ 台本型てびきが単なる台本にならないよう、自分たちの活動にそった独自の内容を扱ったものを作成する。
- ⑧ モデル型（言語活動）てびきが単なる見本にならないよう、モデルと自他の表現、学習課題と自他の表現、目標と自他の表現を批評するような場を設ける。
- ⑨ モデル型（思考操作）てびきが抽象的な型の見本にならないよう、具体的な場面や内容を示したものを作成する。
- ⑩ 語彙集型てびきが辞書的なもので終わらないよう、具体的な例文や場面を想起できるものを作成する。
- ⑪ 話しかけ型てびきが説明型てびきにならないよう、個人別の課題にそったものを作成する。
- ⑫ チェックシート型てびきが一般的な点検項目が並んだものだけにならないよう、具体的なふり返りの手がかりとなる単元固有の学習場面にそった項目を立てて作成する。

#### 4. 今後の展望

前研究の成果であった三つのカテゴリの実証的有効性については、複数の実践者のもとでその検討が図られた。今後は、本研究における新たなカテゴリについても、その有効性を検討していきたい。そのためには、教室の事実を省察する方法とその効果を測定する方法を確立する必要がある。現段階では以下のような研究の計画を立てることが有効であると考えている。

自ら問いを立ててその解決を目指す学習課題の提示については、子どもが立てた学習計画と子どもによる学習のふり返りとを重ねて分析する方法である。

協働しながら新たな価値を生み出す言語活動の提案については、単元中のグループ学習の事実を子ども自身がモニタリングできる機会を設定し、モニタリング時の発話思考を記録し分析する方法である。

主体的に判断して学び続ける学習のてびきの提供については、子どもが学習のてびきの有効性を評価し、それを教師が省察し次の学習のてびきづくりに活用する方法である。

どれもが、子どもとともに行う研究である。改めて言うことではないが、質の高い学習の営みを創造する研究が子ども不在で進められていいはずがない。今後も教室の声に学ぶ研究を深めていきたい。

（本学教授）

#### 註

- (1) 平成 27 年 06 月 07 日、佐賀大学での教員免許状更新講習「小学校国語科教科書を読む」での質問およびそこから始まる検討には次のようなものがあった。《質問》「学習のめあて」「学習目標」「学習課題」など、授業開始時に黒板に示されるものが統一されていないが、どのように考えればいいか。《検討》「学習

のめあて」「学習目標」「学習課題」というように示されている名称は異なるが、概ねその時間の活動で目指すところを意味しているように思われる。学級担任や教科担当が変われば、その表記の仕方が変わるようでは、子どもの学習習慣の定着を妨げになるようにも思われるので、ある程度の統一が図られてもいいように考える。そして、統一された示し方をするのであれば、それは子どもが学習を進める過程で、主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことを可能にするようなものでありたい。

- (2) 平成 27 年 07 月 30 日、佐賀県教育センターでの小学校国語科Ⅱ講座「自分の考えを明確に書く力を育む授業づくりー「書くこと」領域においてー」での質問およびそこから始まる検討には次のようなものがあった。《質問》言語活動を深められる発問はどのような発問ですか。《検討》教師からの発問によって言語活動を深めるというより、子どもが自分に発問する、つまり自分自身に問いかけるような、自分自身に問いかけることで、その言語活動が続いていくというようにしたい。だからこそ、言語活動のモデルとなる学習のてびきと、思考操作のモデルとなる学習のてびきを準備して、言語活動が深まっていくようにしたい。
- (3) 平成 27 年 08 月 02 日、長崎大学での教員免許状更新講習「授業実践力をつけるー小学校国語ー」での質問およびそこから始まる検討には次のようなものがあった。《質問》言語活動はどんなものがありますか。《検討》学習指導要領や教科書に示されている言語活動例を大いに参考にしつつ、やはり学級の子どものことを熟知している学級担任や教科担当が開発することが大切である。新聞や書店、百貨店、インターネットなどを参考にするとともに、職員室での同僚との談話などから単元開発が深まることはよくある。研究会などでの情報交換も有効であるが、やはり、教師が実際にその言語活動をやってみることでそこから数種類の言語活動が生まれる。そして、教師が独自に考えた言語活動には修正しなければならないことがあるが、学級の子どもにはたいへん効果的な言語活動になる。
- (4) 平成 27 年 08 月 06 日、出水市立高尾野小学校での鹿児島県出水地区小学校国語教育研究会・北薩地区小学校国語教育研究会夏季合同研修会「国語科単元と授業づくり」での質問およびそこから始まる検討には次のようなものがあった。《質問》学習のてびきとワークシートはどう違うのか。《検討》形態でいえば、ワークシートは用紙に印刷したものだが、学習のてびきはそれだけに限らず、参考になる一冊の本である場合もあれば、パンフレットや資料などのものもある。映像や音声のてびきもある。教師が話しててびきすることもある。前年度までの子どもの学習成果などをてびきとして活用することも多い。ワークシートの中には、虫食い問題のように穴埋めの形式のものや、罫線や枠だけが印刷された単なる解答欄のようなものも見られるが、学習のてびきは、それを活用することで子どもが動き出すようなものとして考えたい。
- (5) 平成 27 年 08 月 11 日、鹿児島県教職員互助組合会館での鹿児島県小学校教育研究会国語部会夏季研修会「小学校国語科授業のアクティブ・ラーニングー単元、グループ、学習材ー」での質問およびそこから始まる検討には次のようなものがあった。《質問》学習課題は子どもが立てるのか。《検討》単元を設定するのは教師であるので、単元を通した学習課題は教師を立てるのがいいと思う。ただ、子どもが受け身になることは本来的ではないので、単元びらきとともに、子どもが自ら問いを立ててその解決を目指すようになっていくようにしたい。例えば、毎時間ごとの本時の課題、小さな課題は各自が立てるようにしたい。このことは、直前の活動のふり返りを有効に活用することで可能になると考えられる。
- (6) 平成 27 年 08 月 19 日、大分県教育会館での平成 27 年度大分市小学校国語教育研究会「夏季研修会」「小学校国語教室の創造「学びどき・教えどき」ー単元、アクティブ・ラーニング、グループ学習ー」での質問およびそこから始まる検討には次のようなものがあった。《質問》学習のてびきはどのようなものを準備するのか。《検討》本単元において子どもが必要とするであろうと想定されるものはすべて準備する

必要があるが、準備したものが子どもの自律的な学習をつくりだすことを妨げることになってはいけないため、準備したものを子どもに与える適時性をしっかり考えておく必要がある。また、本単元ではたらかせたい資質や能力（つまりその時点で子どもがもっている資質や能力）や既習の学習事項などを確かめたり想起したりすることができるような学習材を準備すると有効であると考え。

- (7) 平成 27 年 10 月 23 日、豊前市多目的文化交流センターでの平成 27 年度 福岡県中学校国語科研究大会（京筑大会）「中学校国語科学習のアクティブ・ラーニング」での質問およびそこからはじまる検討には次のようなものがあった。《質問》中学校国語科の授業で言語活動のモデル（作品）を示すとそのモデルに似たものばかりになってしまうおそれがあるので、モデルの提示をひかえることがある。ただ、そうすると活動が停滞する生徒が出てしまう。《検討》生徒が何をしたいかわからない状態になってしまうことは避けたい。だからといって形式を複写するだけの再生産は本来的ではない。学習モデルだけを示すことがもたらす問題であって、まずは生徒が学習課題を自覚することからはじめることが必要だと考える。
- (8) 平成 28 年 01 月 29 日、文化パルク城陽ふれあいホールでの平成 27 年度 城陽市教員研修大会「国語教室の創造—「単元 《できごとと会話文を関係づけて人物紹介発表会をしよう》の単元びらき」での質問およびそこからはじまる検討には次のようなものがあった。《質問》単元の学習課題や学習計画は柔軟に考えていいのか。《検討》大切なことは自ら問いを立ててその解決を目指す学習課題の提示であり、それを実現させていくための計画である。単元開始時の教師の想定が事実合うものでないこともあり得る。そこは柔らかく考え、教室の事実を根拠として柔軟に変更していくのがよいと考える。

#### 参考文献

- ・大村はま、『大村はま国語教室』、筑摩書房、1982
- ・岡田敬司、『コミュニケーションと人間形成』、ミネルヴァ書房、1998
- ・岡田敬司、『自律の復権』、ミネルヴァ書房、2004
- ・岡田敬司、『自律者の育成は可能か』2011
- ・甲斐利恵子、「学びの場所としての教室づくり」、教育 60 号、国土社、2010
- ・教育課程企画特別部会、「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」、2015
- ・達富洋二、「国語教育における行為の「ふさわしさ」の検討カテゴリー—「今、ここ」の記述からはじめる「授業の研究」—」、『佐賀大國文』第 42 号、2014
- ・奈須正裕ら、『コンピテンシー・ベースの授業づくり』、図書文化、2015

#### 付記

- ・本研究は、平成25～27年度（2013～2015年度）独立行政法人日本学術振興会 科学研究費基盤研究（C）（一般）、課題番号（25370483）、研究課題名「教室談話における「発話—指名行為」の社会言語学的研究」の研究助成を受けた研究成果の一部である。